

は日を追ふて困窮の淵に陥りつゝあつた。時に、昭和六年九月十八日、滿洲事變の勃發の報を、新嘉坡で受け、大いに感動した。國政諸惡の根絶の天惠の機會が來た。同時に豫ての抱負である北守南進の政策を主張すべき好機であると、倉卒として歸朝し、今日まで約十年間その実践行動を續けて來たのである。』

この石原氏は、昭和七年には大川周明博士と共に神武會を組織し、田中國重中將と結んで明倫會の組織に參畫した。昭和十一年、二・二六事件には、その嫌疑を受けて、七ヶ月の幽囚の身となり、最近では末次信正大將と、東亞建設同盟を組織して今日に至つてゐる。然し、石原氏が十年叫び續けて來た、抱負と經倫は、今や國策となつて進行中である。

石原廣一郎氏は、今年五十三歳の若さである。單なる事業家としては餘りにその志が遠大である。政治家の概念で見直さんとすると、氏はあまりに純情である。

石原氏の偉大なる業績と、その役割に對する文明批評は後世の史家に委せるとするも、海外生活二十年、血みどろに闘つてきた氏が祖國日本の國情に義憤を燃やし、遂に事業家の殻を飛び出して、東亞共榮圈確立の警鐘を打ち鳴らしてゐる姿に敬意を表したい。

綜合化學工業の

野口 遵

はしがき

野口遵氏は、いま病を得て、伊豆斐山の別荘に在る。今が七十一歳、氏の主宰する日本窒素肥料は、創業以來實に三十數年、この長い歲月は、不斷に事業の擴張と改造改良と進展への、たゆまざる努力の繼續であつた。

昭和十七年五月五日、長き邊りでは、産業發達に功勞ありたる旨思召して、勳一等瑞寶章御下賜の御沙汰あらせられた。これこそ、彼の偉大なる功勞を深く嘉賞せられた大御心に外ならぬ。

日窒、今日の公稱資本は四億五千萬圓、その關係事業は直系十四社、傍系十七社、電力と綜合化學に於ける規模の雄大と整備は、世界的水準を遙かに越えた發展振りである。

野口の日本窒素は、カーバイドから、石灰窒素の製造に移り、更に硫酸を變成したが、事業の第二期は、合成アンモニア時代である。日窒が始めて採用した、カザレー式合成法は、延岡工場

に於て、世界最初の成功を挙げ、これの成功は肥料工業の一角より脱して、全化学工業の大分野へ進展した。即ち、硫酸アンモニアの製造より進んで、合成硝酸へ、更にベンベルグ絹絲の製造等である。

野口は、この事業の成果を朝鮮に着眼して移し、朝鮮窒素を創立し、赴鮮江の水力電氣を利用した総合化学工業の事業を完成したのである。ここでは、興南工場の「硫磺安」の製造から「硫磺安」次いで「過燐酸石灰」その他の調合肥料や、石炭低温乾溜工場を永安に建設した。次には、世界一の漁獲高を誇る朝鮮近海の鯛を加工して、火薬の原料たるグリセリンにする硬化油工場、更に麵粉工場、苛性ソーダ工場、大豆加工工場、カーボン工場を本宮に増設してゐるのである。

武藤山治の野口評

武藤山治氏は、嘗て時事新報で「豊太閣朝鮮を討つ」の役に加藤清正は、威北威南の地に兵を進め、韓の二王子を捕虜として武威を北邊に輝かしたが、僅か一兩年にすぎなかつた。然るに朝鮮窒素の事業は、北鮮を開拓して既に十年、尙將來の發展を思へば、野口達は加藤清正より偉大なる人物と云ふことになる……」と評してゐる。日本窒素今日の隆盛は、日本の化学工業の成功で

ある、しかも、そのハンドルを握つてゐたのは、人間、野口達である。

嚴父は加賀藩の儒者

野口氏の嚴父野口之布氏は、加賀藩の勤王的學問所を創設した人であつたが、同志と共に勤王を稱へ、京阪の志士と氣脈を通じてゐたために、元治甲子の獄に捕へられ、終身禁錮になつた。獄に暮らすこと足掛五年、始めて御一新の大赦に遭ひ出獄をゆるされた。

後に金澤藩の権少屬から文部省、司法省にも出仕したが、退官して金澤に歸り、晩年は前田侯爵家の漢學教授となつた。

大田出の電車運轉手

野口氏は、この儒者を父に持ち明治六年に生れた。東大の電氣科を出たのが、明治二十九年、その頃日本の電氣界も、まだ幼稚な啓蒙時代で、藤岡市助博士が米國から歸つた新知識で、ランブ亡國論を稱へた時代、博覽會の模型電車に東京人が膽を潰した時代でもあつた。

野口氏は初め江之島・鎌倉を走る電車の運轉手になつた。間もなく電車の衝突事件を起して、神奈川縣廳から出張した役人、江木實に野口運轉手は、大目玉を喰つた事がある。その後彼は仙

電氣へ赴任することになった。時に明治三十五年である。

カーバイド事業

野口氏は仙臺電氣へ勤め乍ら友人藤山常一（工学博士）、市川誠次（日窒副社長）の三人で、協同事業として、カーバイドの製造に取りかゝつた。極く小規模にやつてゐたが、その内に日露戦争が勃發して、攻城野戦にカーバイドが役立つた。當時、一ポンド原價四錢位で出来たものが、軍需品となつて十二三錢に暴騰し、大いに儲けた。

——これが後年、曾木發電所の餘剰電力から、カーバイド製造に進出する奇しき宿縁である。その後、友人と一緒に、シトメンスの自轉車や、電氣器具の取次販賣をやつてゐた。

曾木電氣の創立まで

その内に、東電にがた學友で福島金馬と云ふ男に頼まれて、東京電氣が、社債二百萬圓を必要としてゐるが、アメリカへ行つて交渉してみても呉れぬか、と云ふ相談を受けて米國へ渡つたが、何しろ日露戦争最中のため、日本はロシアに敗けるかも知れない。——と云ふ懸念もあつて、米國での社債募集は失敗し、大西洋を渡つて歐洲へ行つた。

丁度、ベルリンの停車場で、偶然シトメンスの日本支配人ケスラーに逢つた。そこで一伍一什の話をして助力を乞ひ、二人は一緒にミュンヘンへ行くと、日本海軍の大勝利の報である。東郷大將の「皇國の興廢此の一戦にあり」と云ふ名句で、日本人は大いに肩身が廣く、その夜は戦勝気分、方々の酒場を歩いて痛飲した。おかげで形勢を一變して、ケスラーの斡旋で、東京電氣へ二百萬圓の借款は成立した。

野口氏は凱旋將軍の如く、意氣揚々と歸國して、報告すると、重役達が、

「あの借款は、もう他で出来たからその金の必要はない」と云ふのであつた。折角の努力も水の泡であつた。

一萬圓程の慰勞金を呉れたが、野口氏はやけ糞になつてその金で新橋の待合に飲み續けてゐたその時、偶然にも、隣の部屋に、鹿兒島の日野辰次と云ふ代議士と、水屋勇八と云ふ金山の御大盡とが、藝者をあけて飲んでゐた。度々顔を合せる内に、話合つて見ると、鹿兒島の川内川と大口金山の奥にある曾木灘を利用して、水力電氣會社を起す相談が出来たのである。飄箆から胸が出たのである。野口氏はすぐ、實地を踏査して見ると事業は有望である。

そこで、資本金は二十萬圓、鹿兒島の水屋勇八側が十萬圓、東京の野口側が十萬圓と協同で明治三十九年一月、曾木電氣株式會社を創立した。

野口氏はすぐ會木發電所の工事に取り掛つた。水路トンネル延長二百間、發電水車は出力八百キロ送電線は一萬一千ボルトと云ふ、當時としては大規模の高壓を使用した。これが野口氏にとつて、はじめて組織化された事業の始めであり同時に日本窒素肥料の礎石となつた仕事である。

カーバイド製造事業へ

會木電氣の出力は八百キロ、この電力を大口、牛尾、新牛尾の金山へ電力を供給するだけでは餘り過ぎて困つた。そこでこの餘剰電力を利用して、三居澤で經驗済みのカーバイド製造をすることになり藤山常一、市川誠次と共に日本カーバイド商會を設立して、熊本縣水俣村に月産十五噸のカーバイド工場を作つた。

石灰窒素の製造へ

カーバイドの製造は、有利なる事業ではあるが、大工場として大發展を遂げるには、條件に缺ける點が多かつた。そこで野口氏は石灰窒素がやりたかつたのである。丁度、會木發電所が出来た年、即ち一九〇六年獨逸ではフランク、カロリ兩氏がカーバイドを原料に、空氣中の窒素を吸収化合させて、平時は肥料に、戦時は火薬の原料にと云ふ石灰窒素の製造に成功したのである。

このフランク、カロリ兩氏の、石灰窒素法の成功は、二十世紀の化學工業發達史に、特筆大書さるべきもので、この發明は、ドイツ銀行と、シトメンス會社の後援の下に成功し、その特許權は、ローマのジエネラレ・ベル・シヤナミツド會社が所有してゐた。

野口氏はこの特許權を狙つて、その買収に、藤山常一を伴つて渡歐したのである。それは明治四十一年二月であつた。

特許權をめぐる挿話

野口、藤山の兩氏は、地中海からすぐローマに乗り込んだ。シトメンス會社のケスラーを訪ね彼の熱心な斡旋も手傳つて、同年四月に、ベルリンでその契約を締結することとなつたが、その時三井の益田孝も、この特許を狙つてゐたし、ロンドンでは、古河から頼まれて來た原敬が、種々相談してゐる内に、野口氏等の一行は逸早く敵の本能寺を陥れた譯だつた。何しろ野口氏は三十代の若さで元氣一杯ハリ切つてゐた。

「三井は日本一の富豪だ。金ならウンと出すだらう。僕は貧乏だ。しかし、カーバイドを多年やつてゐて試験済みである。明日からでも此の特許が實用化される。三井や古河がやれば、先づ電氣を起す發電所から作らねばならぬ。特許だけ買つても死物だ。金が欲しければ三井へ賣れ、

仕事本位なも僕にやらせろ！」

こんな調子で先方を説き伏せたので、

「歸國したら、三井の資本で事業をやること」と云ふ條件つきで特許権を譲つて呉れた。

日本窒素肥料となる

野口氏は日本へ歸つてから、約東通り三井へ行つて益田孝に逢つた。益田は事業は共同でやるから株を五十一%よこせと云ふ。

「それでは僕は使用人ではないか、何にも苦勞してローマ三界まで行つて来た甲斐がない」といふので、三井との交渉は物別れとなつた。

野口氏は日本郵船の重役堀達に相談して、社長近藤廉平に會つた。更に近藤の紹介で、三菱銀行の豊川良平に相談したところ、牛々の株式でと云ふ事になり、更に同郷の先輩中橋徳五郎の後援で、特許権は四十萬圓、会社は百萬圓の資本金で、日本窒素肥料株式会社と改め、本社を大阪市西區阿波堀五丁目に置いて、新設足することになつた。

会社の苦難時代

会社は大きくなつた。建設資金も出來た。サテ石灰窒素を製造して見ると、その製品が順調でない。その製品は一八%あるべき含有窒素量が十%しかない。その上、製品の産出量も僅少である。それは藤山が、フランクの工場での製法を採らず技術家として独自の製法を取つてゐたからであつた。しかし、藤山は容易に自説をまげず、自己の製法を固執してゐた。その内にカーバイドが爆發して、死傷者が出ると云ふ騒ぎである。そこで、三菱系の重役達は、業を煮やして、「野口や藤山にやらしておいては何をするか知れたものではない」と心配し出した。

会社の成績は一向上らない。説方なく、カーバイドを賣つて、やつと会社は八分配當を續けてゐたが、石灰窒素の製品はまだ出來ぬ有様であつた。その上、石灰窒素を變成して硫酸アンモニアを作る工場を、大阪府神島に建てたが、之も失敗であつた。更に新潟縣姫川發電所まで、大洪水に崩潰すると云つた破目で、会社の経営は遂に難局に立つてしまつた。

石灰窒素製造成る

會社危機の直接の原因は、石灰窒素の製造が出来ぬ事である。野口氏は四十萬圓も出して買った特許が、役に立たぬとあつては株主に申譯がない。そこで藤山に代つて自ら九州へ乗り込んで石灰窒素の製造法を根本からやり直すことにした。その時野口氏は、大阪驛に送りに来た市川誠次に

「成功するかしないかは、まだ確信はないが、生命をかけて努力してみる。旨く行かなかつたら、自殺するか、アメリカへ逃げて行く。今度は必死の覚悟だ」と固く手を握つて別れた。

野口氏はその言葉通り、全生命を打ち込み、寢食を忘れて努力した。何か一つの成案に思ひ當ると、夜中でも飛び起きて寢衣のまま工場へ馳けつけた。夜は二時三時まで工場に居残り、或は徹夜作業を續けて電氣爐の前に頑張つた。そして、やつとの思ひで、完全なる製品を製造することに成功したのであつた。

これによつて、日本窒素肥料は順調な成績をあげることに成り、大正五年には、資本金一千萬圓の大會社に膨脹してゐた。

大 發 展 時 代

第一次歐洲大戰時代には、輸入硫安の杜絶から肥料も狂騰を續け、日窒は増産設備の擴張を重ねて、大いに發展した。大正五年には、順當り二百圓を割つてゐた硫安國內相場が、翌年には三百圓、大正七年の大戦終結前には四百十圓と云ふ高價を示したので、會社の収益も莫大なもので何しる大正九年の上半期には十三割の配當をする。半期の利益が全額拂込資本金以上と云ふので會社は一舉に一千二百萬圓の増資をして、資本金は二千二百萬圓となつた。そして従業員には功勞株を分つた外、特別賞與金を支出したため、職員が一齊に金時計に金鎖をぶらさげたと云ふ笑話まで残されてゐる。

野口氏は、此處で考へた。

「こんなべら痒な景氣がいつまで續くものではない」と。そこで戦後の歐洲には何かあるだらうと云ふ軽い氣持で三度目の歐洲へ渡つた。そしてローマに立ち寄つて、カザレーと云ふ若い化學者が發明した、アンモニア合成法の特許權を百萬圓で買收して來たのである。

歸朝すると、宮崎縣恒富村に、世界最初のカザレー式アンモニア合成工場を建設した。それが現在の延岡工場で、昭和十年十一月十五日には、長くも天皇陛下の行幸を辱うし、従業員一同無上の光榮に浴した。

このカザレー式アンモニア合成法の採用は、從來の石灰窒素製造法に比較して、電力の節約、

製造工程の簡易、製造費の半減等で日産の事業に新生面を開拓したものであった。

野口氏の事業的性格

野口氏は休息を忘れた事業家である。この人のためをさる前進への努力は、氏が朝鮮の赴鮮江水力を利用して、一大化学工業の建設に乗り出した姿にも見られる。

朝鮮窒素の事業も、今日の完成までには多くの波瀾曲折があつた。発電所工事は意の如くならず、多くの資金を要して、完成したものは、後期した出力なく、一方世界的不況に見舞はれて、諸外国から硫安のダンピングに逢ひ、野口氏は朝窒を抱へ、進退兩難に直面した。

幸にして、宇垣朝鮮總督の理解ある口添へや、朝鮮銀行の援助によつて、事業は今日の完成を見たのであるが、創業以来、援助を惜しまなかつた三菱銀行が、朝窒に對して敬遠の態度に出たのは野口氏の猛獸の如き推進力に、金融資本家として警戒の念を忘れなかつたからである。しかし、此の野口氏の冒險に等しい推進こそ、日本の化学工業を急速に發展せしめた推進力となつたのである。

一氏を危機から救つた唯一の武器は、氏の本城たる、日本窒素肥料が播きなき礎石の上に成功してゐたからである。

後世へ残す愛國精神

昭和十五年二月、野口氏は朝鮮に於て發病、遂に臥床するや財産整理を急いで、三千萬圓の財産を惜し氣もなく投げ出してゐる。二千五百萬圓を科学研究費にとして、財團法人野口研究所へ五百萬圓を、朝鮮學堂への奨學資金にと、朝鮮總督府へ、しかも、この三千萬圓の金こそは、青年野口氏が、三十餘年間に汗と脂で稼いだ財産であつた。

最初、會木電氣の資本金二十萬圓の内十萬圓の拂込金は、當時友人である下谷銀行の支配人であつた千澤平三郎に語つて引受けて貰つたのであつた。二十萬圓の會社が、三十年間に四百五十倍、更に二千倍の四億圓の資本に増加して、得た財産であつた。

人間、野口運は今、俗塵を洗ひ落して悟りきつた姿に立ち返つてゐる。

日本窒素は、氏が事業家として残した偉大な足跡であるが、野口研究所は、將來の日本科學發達を希ふ、氏の愛國心の發露に外ならぬ。この氏の精神的プレゼントより第二、第三の野口運の出現を、我等は希望するのである。

昭和十七年十一月十日 初版印刷
昭和十七年十一月十五日 初版發行

(三四〇〇部) 職場の科學者

定價 壹圓五拾錢

著者 東京市淺草區光月町一香地二號 綜合經濟研究所

發行者 東京市淺草區光月町一香地二號 綜合經濟研究所

印刷者 東京市芝區南佐久間町一ノ五三 山本清作

印刷所 東京市芝區南佐久間町一ノ五三 巧秀舎山本印刷所

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

東京市淺草區
光月町一香地二

綜合經濟研究所

電話根岸(87)一七三八番
振替東京一一七一五二番
文協會員番號一一五〇〇七番

出文協承認
ア 150038



發行所

425
435

綜合經濟研究所出版部近刊圖書

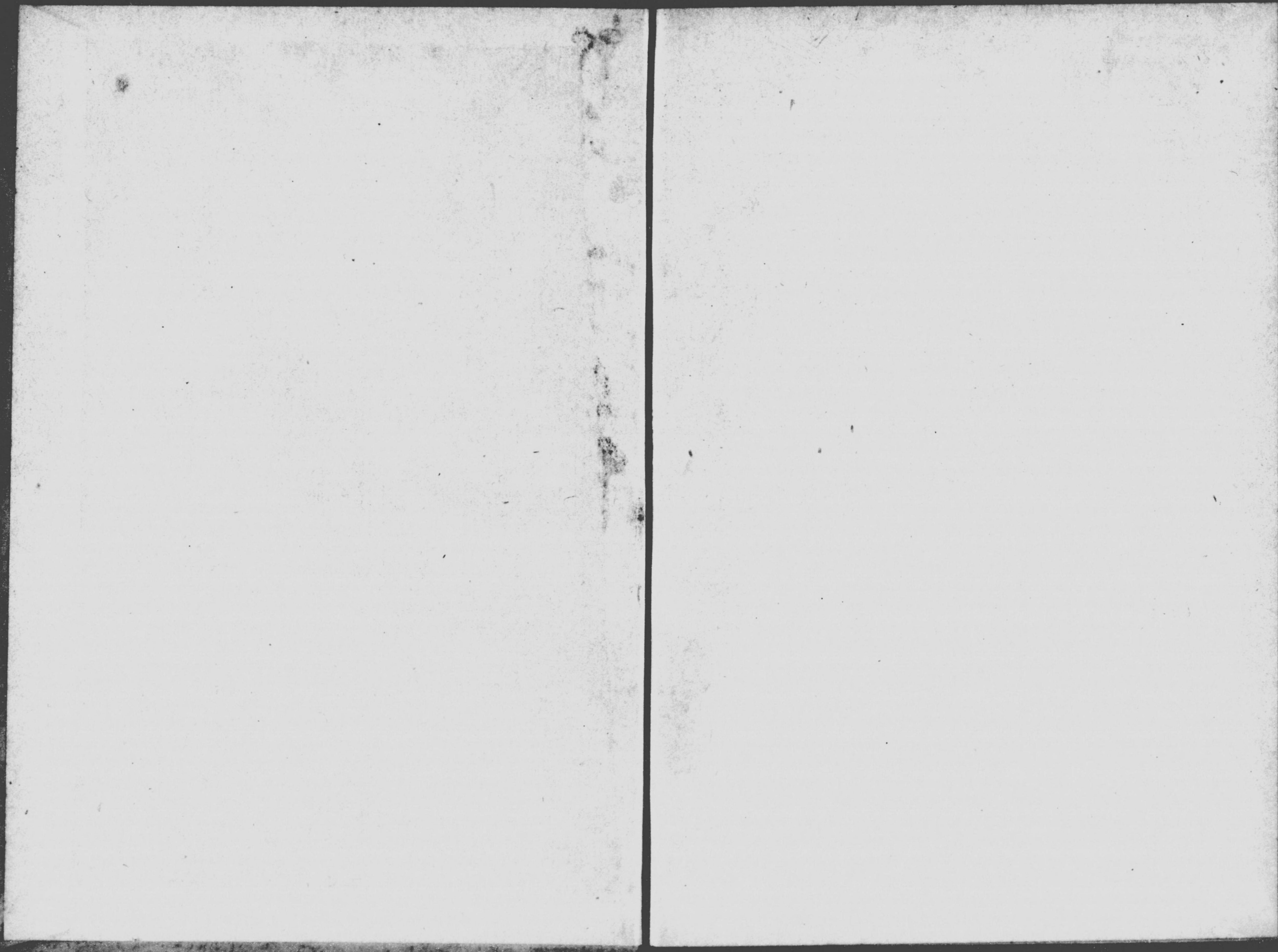
何故轉業しなければならぬか。轉業施設はどうあるか。又實際轉業體驗者はどんな心境でゐるか。或は轉業者を迎へる側はどんな意見でゐるか。——企業整備と轉業對策及其の實際を凡ゆる角度から眺め——轉業が顯落を意味するものでなく、發展的轉業たる事を自覺させ、未轉業者に轉業への憧れと、希望と、勇氣を與へるのが本書である。

轉廢業 針轉職者の手記

B6版二三〇頁
定價 壹圓
送料 一六錢

——企業整備と轉業對策——

部	何故企業整備が必要か……………	商工省企業局長	豊田雅孝
一	轉廢業施設に就て……………	厚生省職業局長	持永義夫
の	轉業者と滿洲開拓……………	拓務省拓北局長	今吉敏雄
執筆者	轉業者の體驗告白——		
	三味線持つ手に簿記帳抱え(藝者から工場事務員に)……………		竹内正子手記
	成らぬは人の爲さぬなりけり(洋服仕立職から鐵工所へ)……………		宮崎 大手記
	白髪を集めて青年工に任す(豆腐商からベルト會社へ)……………		尾形長八手記





¥ 1.50

發行所 綜合經濟研究所